

編集： 山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp URL: <http://www.sanchai.net>

ここはDC?それとも北海道?

東海岸大寒波襲来パート3

今年の冬は寒い——という話題を先月提供したところ、その後2月に入って寒さは幾分かはやわらいだ。ところが、2月は積雪が半端ではなかった。6日(木)は夜からの降雪で、宴会に出かけていた浩司パパは帰宅に難儀した。そこで積もった雪が融け切らないうちに、14日(金)夜から降り始めた雪は、翌日いったん止んだ後、15日(土)夜半から本降りになり、17日(月)午後まで止むことなく降り続けた。



16日(日)朝に一度は雪かきを試みたが、かいてもかいてもみるみる積もってゆく雪に罅が開かないと諦めたパパは、翌朝窓の外を見て我が目を疑った。ガレージ・スペースに駐車してあったミニバンが雪に埋まっている。それだけではない。いざ雪かきに行かんとばかりに玄関のドアを開けたところ、なんと玄関の踊り場も階段も全て雪で埋没しており、雪かきに出るための足場を確保するの先ず雪をかき出さねばならない始末であった。

平均すると約40~50cm、ところによっては1m近い積雪だった。玄関から前の通りまで下りる歩道の雪を両側にかき出していったところ、なんと玄関すぐ横から道路まで滑り降りることすらできるという大型のすべり台ができてしまった。さらに、ガレージ・スペースの雪をかき出してガレージの南側の芝生の上に積み上げていったところ、ここも巨大な山が出来上がってしまった。結局、埋もれていた車を2台とも掘り出して、ガレージのシャッターを開けられるようにするところまで行くのに半日かかった。

我が家の前で雪かきを続けていると、ノーマル・タイヤを履いたロード・クリアランスの低いセダン車が我が家の前で動けなくなった。両輪の轍の間に溜まった雪をスコップでかき出し、この車の移動を手伝い、結局300m近い人助けをしてしまった。



連邦政府もお休みに！

17日（月）は元々祭日だったが、その夜友人と行く予定にしていたジョージタウン大学対ピッツバーグ大学のバスケットボールの試合は中止になった。夕方ぐらいになると、公立の学校に続き、郡や市の役所も18日（火）の休業が決定し、さらに連邦政府までが休業になった。それに連動して、世銀勤務のパパも、私立の託児センターの千智も休みになった。嬉しい4連休と言いたいところだが、別にどこかに出かけられるわけでもなく、殆ど家に閉じ込められている感じだった。

雪かきで腕と腰がパンパン

連日の雪かきで、パパはヘトヘトに疲れ果ててしまった。元々、この週末を迎える前からパパは体調を崩し始めていて、土曜日のお呼ばれの時にも、ビールを飲んですぐにダウンしてしまった。日曜日からは断続的に雪かきを務め、氷点下の寒空の下で肉体労働に精を出した。なぜかそれで体調が徐々に回復するのだから不思議。

結局樹生は1週間休み…そして発熱

雪が積もると、公立の学校はすぐに学校休業になってしまう。結局、除雪車がなかなか入らない通りに住んでいる生徒に考慮して、公立学校は18日どころか、その週末まるまるお休みになってしまった。それで樹生も翌週24日（月）からきっちり学校に行ってくれば問題はなかったのだが、大雪の中しっかり外で遊びまくった樹生くんは22日（土）夕方頃から熱を出し、結局さらに月、火と学校を休んだ。自分だけ度を超して遊びに熱中した後体調を崩すのは樹生くんのお決まりのパターンだ。いつもは元気過ぎてパパから「うるさい！」と怒られてばかりいる樹生くんも、高熱でグッタリしているとやっぱりパパもママも心配だ。

千智の方は、連邦政府が通常業務を再開した19日（水）からは託児センターも再開されたため、翌木、金曜日には託児センターに連れて行った。千智の方は、お菓子代わりにビタミン剤をいつも食べているのが奏効したか、大雪の中体調を崩すこともなく、元気に通学している。

なんとか樹生くんも26日（水）からは学校に復帰した。でも、なんとなんとこの週後半には別の雪雲がワシントン州を直撃し、28日（金）はまたまた公立学校が休校になってしまった。当然学校側では授業時間の埋め合わせをどこかで考えなければならないわけだが、今のところ、平日に1日30分授業時間を延長する方向で検討が行なわれている。

大雪の後始末もなかなか大変

雪が止めば安心、というわけでは決してない。記録的な積雪量で、庭には想像を絶する重量がかかっている。雪解け水が地面にしみ込み、地盤を緩める可能性は十分ある。隣りのオショーネシー家の室内ガレージは、地下からの浸水で水浸しになった。我が家もさすがに裏庭から階段を下りて地下室に入る入り口の浸水を心配して、早々に階段の雪かきを済ませた。

巷では、学校やショッピングセンターの屋根が雪の重みで潰れたなんて事故も起きたらしい。

雪が融けたら融けたで翌朝は道路がスケートリンクと化す。信号待ちの車がそのまま停止線でスタックして渋滞の原因を作る。またこちらの道路は施工が日本ほどしっかりしておらず、ひとたび積雪があるととたんに舗装がめくれたり陥没したりで、デコボコ道になってしまう。自動車通勤も結構命がけだ。



大雪で退路を絶たれた週末に、テロに備えるこの虚しさかな…

アメリカ全土に「コード・オレンジ（危険度大）」が発令されて以来、我々の生活も緊迫の度を増している。非常時にすぐに我が家を棄てて安全な場所に脱出できるよう、車には予備のミネラルウォーターを積み、パパは万が一オフィスの中で缶詰にされる可能性を考えて最低オフィスで1泊できるよう着替えや緊急食料を詰めたバッグパックをオフィスに置いている。そして、万が一我が家を棄てて逃げるといった事態に陥った場合は、バージニア州の州都リッチモンドに取りあえず逃げようという話も家族とはしている。そんな準備をやりながら、窓の外に目をやると、虚しくなるばかりの降雪と雪化粧。前の通りはなかなか除雪もされず、こんな時にテロでも起こされたら逃げようにも逃げられない。降り続く雪が恨めしくて仕方がなかった。

「コード・オレンジ」発令、避難体制構築を急げ！

――テロ厳戒体制下のワシントン生活

上でも述べた通り、2月7日、アメリカ連邦政府は、国家警戒レベルを「イエロー（高まりつつある）」から「オレンジ（高い）」に引き上げた。この警告「コード・オレンジ」は、アメリカ国内外のアメリカ権益に関するもので、アメリカ国内で比較的警備が手薄で狙いやすい住居ビルやホテルなどに対するテロ攻撃や、化学・生物及び放射能兵器による攻撃があり得るとしている。また、アメリカの力を象徴する標的や、運輸及びエネルギー産業といった標的への攻撃の可能性についても言及し、アメリカ政府は、警戒を高めることでテロ攻撃を抑止し、未然に防ぐことに繋がるとして、市民に対しては警戒を怠ることがないようにしつつも、通常の生活を送ることを呼びかけ始めた。（以上、日本大使館情報）

ホワイトハウス周辺には、地对空ミサイルが配備され、普段よりも多くのパトカーが動員された。地下鉄の駅では警官が必ず1人は警備に当たっている。地元紙ワシントン・ポストでは、DCで何かが起きた場合の緊急避難ルートに掲載し、各家庭に1つ、外気の侵入を防ぐ措置を施した部屋を確保し、窓枠にはビニール・テープを貼り、その部屋には着替えや緊急備蓄食料を配備するよう呼びかけ始めた。さらに、家族が離れ離れになった場合のことを考え、予め緊急時に家族全員がどこに集まるかを打ち合わせておくようにと提唱している。

ホワイトハウスから僅か2ブロックの我がオフィスは、ホワイトハウスで何かが起きた場合は巻き添えを喰う可能性も高い。でも、こうした危険に対する感応度はかなり鈍く、「コード・オレンジ」発令から1週間近くが経過して、初めて総裁と職員との対話集会が開かれ、緊急時の対応振りについて説明が行なわれた。でも、要するにオフィスビルからどう脱出するかという話で、そこから先は新聞にも掲載された避難ルートを使い、つまりは自分の身は自分で守れということであった。JBIC（国際協力銀行）から世銀やIMFに出向している職員の切迫感はかなり強く、どのルートでどこに逃げて落ち合うか予め決めておこうという動きがある。JBICのワシントン事務所員は当面の間地下鉄通勤を取りやめ、タクシー通勤を指示した。勿論JBIC負担だ。一方、我がJICAの事務所は、タクシー通勤の予算を本部に認めてもらえず、危ない地下鉄通勤を続けた。緊急避難後の集合場所の取り決めは一切なく、こちらも要はとにかく各自の判断で自力で逃げて、安否確認の連絡を事務所員に入れよということだった。

毒ガスなのか細菌兵器なのか、はたまた「ダーティ・ボム」と呼ばれる小型核爆弾なのか、いつ、どこが狙われるのか、予想もつかない。細菌兵器だったら、ポトマック河の橋が全て封鎖され、私はバージニアに入ることが許されずに、家族と会えないことだってないとは言えない。そんなこんなと考えると、ワシントンでの生活自体、結構命がけだと思ふようになった。

こんなに市民を不安の淵に追い込みながらも、時の為政者は「攻撃を未然に防ぐための戦争」などという、前代未聞の攻撃を画策中である。そんな国に盲目的に従おうとしているアジアの島国も、結構危ないのではないかと。幸い、28日には「コード・オレンジ」は解除されたが、だからといってテロの可能性が全くゼロになったわけじゃない。

（浩司）

デイジー・ミラー夫人のご逝去

浩司パパ、再びルイジアナへ

2月18日（水）、バトンルージュで一人暮らしをされていたデイジー・ミラー夫人がお亡くなりになりました。大雪との格闘が始まった15日（日）、夕方の雪かきを終えてメールをチェックしたところ、夫人の三女のキャミから「母危篤」との連絡を受け取りました。メールによれば、ミラー夫人は1月末に風邪をこじらせて入院した後、徐々に肝機能が低下して、医師からあと1週間との宣告を受けたそうです。しかしその1週間が経過したところで、ミラー夫人は自ら希望し、シャーウッド・フォレスト地区の自宅で残り少ない人生を子供や孫、曾孫達と過ごすことにされたそうです。

私にとっては、1985年の海外留学でホスト・ファミリーとしてお世話になって以来、18年間交流をさせていただいて来ました。仕事でワシントンに赴任してからも、家族を連れて、二度夫人宅を訪問しています。「サンチャイ通信」第21号でもご紹介したように、昨年末のクリスマス休暇でも、ルイジアナ、ミシシッピを観光するのに、僅かの時間ながら夫人宅を訪ね、次男のチャックさんご夫妻も交えて中華レストランで夕食をご馳走になったりもしました。その時はとてもお元気だったので、まさかこんなに早くにお亡くなりになるとは思ってもみませんでした。81歳でした。

振り返ってみても、私は筆まめな方ではなかったもので、手紙も年に1回出せばよい方で、ご夫妻からの返信もなかなか届かなかったもので、90年代の前半は暫く音信不通になりました。その後、ご主人のミラー氏は既にお亡くなりになり、それを知らずに私が96年末にネパールから出したクリスマス・カードに添付した「サンチャイ通信」英語版を読んだキャミが、たまたま私の当時の電子メールのアドレスが記載されているのに気付く、ミラー氏のご逝去を知らせてくれました。それ以後はキャミとのメール交信によって、近況を知らせることができるようになり、今回のアメリカ勤務でも、気軽にバトンルージュを訪れることができるようになりました。

ご逝去の知らせを受け、取りあえず私は単身でバトンルージュに赴き、21日（金）から22日（土）にかけて行なわれた夫人の葬儀に参列しました。85年の感謝祭以来の再会となった二女のテレサがとりわけ喜んでくれ、「コージはママの息子なんだから」と言って、お棺を閉める前の最後の家族とのお別れにも、ダイアン、テレサ、キャミ、チャックといった実子と一緒に立ち合わせてくれました。葬儀の一連の行事では、日本の葬儀とは違って非常に明るい表情で夫人の新たな旅立ちを祝うが如く振舞っていた家族も、さすがに最後のお別れに際しては涙を抑えることができず、私も目頭を熱くしました。

後でテレサやキャミから聞いたところでは、初めて外国人留学生として受け入れた私が非常に好印象だったので、その後も2人の留学生の面倒を見たが、今でも夫人と連絡をとっているのが私だけで、ワシントン赴任後は家族を連れて二度も訪問してくれたというので、とても喜んでおられたとのこと。私はミラー氏のご逝去を1年以上経過してから聞かされたことに若干の後悔を感じておりましたので、不謹慎な言い方かもしれませんが、今回に関しては、夫人と最後のお別れの挨拶をすることができたのは良かったと思っています。

22日（土）午前、カトリック教会での葬儀ミサを終えて、墓地に車列が向かう途中、非常に強い夕立に襲われましたが、参列者が墓地に到着し、埋葬前の式典を行なう際には雨も上がって晴れ間が覗きました。そして、式典を終えて参列者が解散するやいなや、再び夕立が襲ってきました。私はあまり奇跡を信じる方ではありませんが、この時だけは、夫人のお気持ちが空に通じたのではないかと思います。夫人の棺は、Resthaven Garden of Memories 墓地で、ミラー氏の墓の隣りに埋葬されました。

葬儀の後、長女のダイアンの自宅に家族と関係者が集まり、ホームパーティーが行なわれました。「母は亡くなったけれど、まだ私たちがいるからこれからもここを故郷と思って訪ねて来て欲しい」とテレサやキャミ、チャックさんの奥様のケイティさんから言われ、これからも連絡を取り合おうと約束し、バトンルージュを後にしました。ミラー夫人のご冥福をお祈りいたします。（浩司）

アメリカの小役人は途上国並み

——マッサージ・セラピストへの道、ママの社会保障番号取得奮闘録

アメリカで働く人は皆社会保障番号 (Social Security Number) が必要です。2月に入り番号を取得するためソーシャル・セキュリティ事務所に行き、必要書類を出すと、出生証明が必要だと言われました。私が世銀関係から貰っていた説明書類にはパスポートがあればいいと書いてあったので、出生証明など用意しておらず、「パスポートではダメなのか？」と聞くと「数ヶ月前から必要になった」との答え。それでも納得がいかなかったので「日本では出生証明を発行する制度がない」と言ったら、「他の日本人は持って来ている」と言い、さらに必要になったという文書のコピーを見せてくれました。実はあまり英語の得意でない私は、その文書の半分も理解していなかったの、家に帰ってじっくり読もうと思っていたら、担当者 (中国系の女性) は持ち帰ってはいけないと言ったので、しぶしぶその場は引き下がり番号取得申請が出来ずに家に帰りました。

帰宅後、先ずソーシャル・セキュリティーのフリーダイヤルに電話して必要書類を問い合わせると、受付のオペレータは出生証明は必ずしも必要ではないような口ぶりだったので、窓口で必要と言われたと告げると、「では必要なのでしょうか」との回答でした。次に日本大使館に電話し、出生証明の発行について問い合わせると、戸籍謄本または抄本が必要と言われましたので、早速実家に電話して戸籍を送ってもらうように頼みました。待つこと約10日、いつもなら早ければ5日ぐらいで届く手紙が今回に限って時間がかかりました。そして、戸籍謄本が届いても、大雪で子供の学校が休校になり、すぐ日本大使館に出生証明を申請しに行けません。ようやく学校が再開し、大使館に申請に行き、翌日には出生証明を取得することができました。そしてその足で、ソーシャル・セキュリティ事務所に行き2度目の挑戦で社会保障番号申請が受理されました。しかし、この時私はあえて出生証明を提出しませんでした。にも関わらず、申請は受理されてしまいました。いったい前回言われたことはなんだったのだろうか？担当者によって言うことが違うなんて、途上国の役人と同じではありませんか！今まで必要書類を揃えるのにかかった時間と、待っている間に私の士気が段々下がって行ったことを考えると、やるせない気持ちになります。

後日、念願の社会保障番号 (Social Security Number) が郵送されてきましたが、今度は私の名前が間違っていたため、また窓口に行って申請し直しでした。3月9日現在も私の手元に正式な書類が届いておりません。知人にこの話をしたら、「自分はグリーン・カードの申請をして名前を間違われたので、対応策を聞こうとフリーダイヤルに電話したら、4時間待っても繋がらず、3回手紙を書いても返事が来なかった」と言われました。また、「窓口によって混み方も対応も違うから、申請場所を変えてみるというよ」とも言われました。

アメリカにまだ来たばかりの頃感じていた役所などのサービスの悪さを改めて思い知らされる1ヵ月でした。(美澄)

ぼくのスーパー・サウンドブック

親にもキツイ、樹生の宿題

1月に入ってから、樹生の学校では、英語のライティング能力を身につけさせるために宿題が課されるようになった。「スーパー・サウンドブック」といって、アルファベットの各文字が頭につく単語を示す絵を園児に描かせ、その後でそれらの単語や、絵には描かれていないけれど同じ文字が頭につく単語をふんだんに盛り込んだストーリーを作文させろというものだ。毎週2文字についてイラストとそれが示す単語の綴りを書き、別の2文字についてストーリーを考え、作文しなければならない。ストーリーはともかく、動詞変化や形容詞、副詞、前置詞の使い分けについて殆ど知識がない樹生が、文章をいきなり書くのは当然大変だ。ストーリーを考えてお手本となる文章を書き出すのがパパとママの仕事であり、その文章を手本に自分の作文として書き写すのが樹生の仕事である。

でも、ストーリーを考えるのはパパやママにとってもかなり大変である。1文だけならなんとか作れるが、文を幾つも繋げてストーリーに仕上げる芸当など、この親ですら今まで経験がなく、頭を悩ませながらなんとか3~4文を作るだけでも既に1時間以上経過してしまっている。担任のハーモリー先生もある程度はそれを想定しているらしく、彼女がサンプルとして父兄に提示した文章は、この私でも知らないような形容詞や副詞が使われている。(いや、ひょっとしたら我々の語彙がアメリカ人の幼稚園児以下なのかもしれないぞ!?)

樹生くんにしてみれば、イラストを描くのは好きなので何の問題もない。イラストや写真をふんだんに使用した幼稚園児向けの英語辞典を樹生に買い与えたが、毎週その辞書を利用して楽しみながらいろいろなイラストと単語を書き出すようになった。最初の頃は、親の書いた下書きを筆写していても、大文字と小文字の区別がつかない変てこな作文しかできなかつた樹生も、今では1つの線上にきちんと乗って、大小の文字の区別もはっきりとわかるようなライティングができるようになってきた。

思えば、樹生と同じ頃、パパも読売ジャイアンツのレギュラーの打順を漢字で書く異才を発揮していた。漢字とまでは行かないけれど、この2ヵ月の樹生のライティングの進歩は著しい。英語だけでなく、日本語の五十音順にも興味を持って、ひらがなもカタカナも書けるようになりつつある。これだけ柔軟に吸収していける子供の頭脳が羨ましい！
(浩司)

編集後記~山田家短信

- この2月は、なんだか人の命の重さを考えさせられる1ヵ月になりました。デージー夫人のご逝去だけでなく、美澄の叔父のご逝去という出来事もありましたし、2月1日にはスペース・シャトル「コロンビア」の空中分解事故が起きて7人の乗組員が全員殉職という痛ましい結果にもなりました。7人の乗組員を「英雄」にまつりあげる一方、着々と進められるアメリカのイラク攻撃準備を見ていると、民間人の日常生活を破壊するどころか尊い命すら奪いかねない愚挙に向かってまっしぐらの為政者の発言は情けないばかりです。太平洋戦争の際の米軍による日本本土空襲とまるで同じですが、先制攻撃を受けて反撃に転じた太平洋戦争と、攻撃を未然に防ぐための先制攻撃という理屈で準備を進めているイラク攻撃には、動機の面では非常に大きな違いがあります。そんな国に盲従する日本政府の姿は非常に悲しいです。核廃絶では「広島・長崎の経験」を連呼する日本政府が、なぜ「空襲を受けて全てを破壊された経験」を好戦的な欧米の為政者に対して語れないのでしょうか。このままでは、「先制攻撃を受けて反撃に転じる」という理屈で、アメリカだけでなく日本すらテロという「貧者の武器」の餌食になり、悲しみが悲しみを招く連鎖に繋がりがねないように思います。日本在住の読者の皆さん、くれぐれもお気をつけ下さいませ。(浩司)

パパの体重

83 kg
(3月5日現在)

- 2月を一言で言えば「雪」でした。記録的な大雪、その後の大雨、この雨で地下室に浸水した家も多かったです。隣りのオショーンシー家もガレージに浸水し、トーマスの誕生日パーティーにトーマスのお父さんは行けませんでした。我が家も過去2回地下室に浸水している経験から前日から警戒し、枯葉で排水口が塞がれないよう何度も見に行きました。丁度、浩司さんがミラー夫人のお葬式で不在だったのですが、幸い我が家は被害がありませんでした。しかし、排水しきれない雨が壁のひび割れから噴出しているのを見て、壁が崩れるのではないかと心配になりました。そしてまた大雪。樹生の学校は休みになるし、生活のリズムがすっかり狂ってしまいました。(美澄)
- 樹生の学校が1週間休みなった時、対応に困った私は友達と一緒に子供を連れてボウリングに行くことにしました。ピンやボールは日本と同じサイズですが、子供がやるときはガターにボールが落ちないようにカバーしてあり、ものすごく下手な私でも100以上のスコアを出すことができました。樹生も小さいながら片手で重たいボールを投げ楽しんでいました。こちらは何でも小さい時からスポーツが楽しめて良いですね。(美澄)